

歴史

等々力溪谷を含む地域一帯は、昭和八年（一九三三年）に多摩川風致地区に指定されました。東京府の緑地計画の一部として、護岸と川沿いの遊歩道の整備事業に着手し、昭和十一年に竣工しました。昭和三二年（一九五七年）に風致公園として都市計画決定され、東京都が昭和三十六年から三十九年にかけて整備をしました。そして、溪谷沿いの一部を中心に昭和四十九年に世田谷区立等々力溪谷公園として開園しました。その後、計画区域内の用地取得と整備を進め、現在は三ヘクタールを超える区域が公園となっています。

また、等々力不動尊の敷地を含む、溪谷一帯の約三・五ヘクタールの区域は、平成十一年三月に東京都文化財保護条例によって「名勝」の文化財指定を受けました。

溪谷の水、湧水

等々力溪谷を構成する谷沢川は、現在の上用賀六丁目付近を水源とし、用賀・中町を貫流します。そして等々力駅付近から溪谷の様相を呈しはじめ、溪谷内で不動の滝も合わせ、その後、一部が六郷用水（丸子川）へ、残りは多摩川へと流れていきます。この谷沢川には、平成六年（一九九四年）より仙川浄化施設からの導水が始まり、水質の改善がおこなわれました。

また、等々力溪谷には約三〇箇所以上の湧水が発生し、一部は窪地に集まって湿地を形成しています。

谷沢川の水質は、ゴルフ橋から下流に行くにしたがって改善されていることから、この谷沢川に流れ込む湧水が、水質や水量の維持に大きく寄与していることがうかがえます。

等々力溪谷の湧水は、東京都により平成一五年（二〇〇三年）に「東京の名湧水五七選」に選定されています。

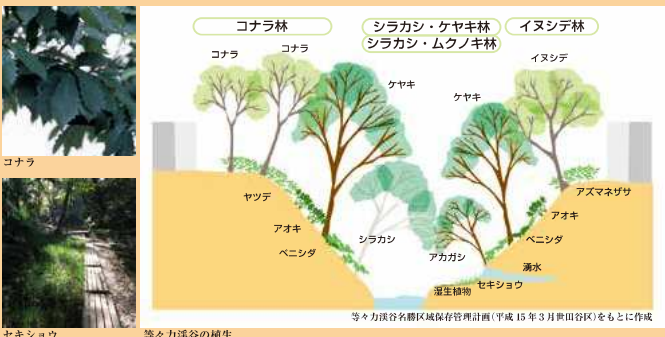


植生

等々力溪谷の植生は、武蔵野台地の崖線の潜在自然植生と考えられるシラカシ群集ケヤキ亜群集であり、大径木を主体とした樹林地が溪谷の斜面に沿って連続しています。

崖線の斜面部分には、主としてシラカシやケヤキ、ムクノキが、斜面上部や台地にはイヌシデやコナラが多く分布しています。

また、湧水が流下する緩斜面にはセキショウ草地が見られ、湧水が溜まる場所には湿生植物が点在しています。

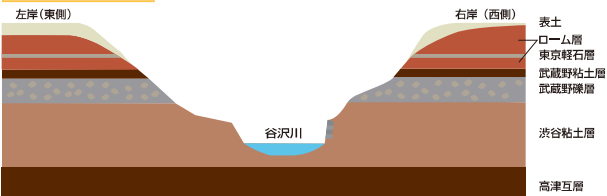


等々力溪谷の植生

地形・地質

等々力溪谷は、武蔵野台地の南端に位置しており、この台地を浸食して形成された開析谷です。溪谷沿いには、武蔵野台地を特徴づける地層断面がよく観察できる箇所があります。地質の分布状況は、下から、台地の基盤である上総層群の高津互層（泥岩層）、その上に堆積する渋谷粘土層、武蔵野礫層、武蔵野粘土層、東京軽石層、ローム層（武蔵野ローム層、立川ローム層）の順にほぼ水平に堆積しています。また、渋谷粘土層と武蔵野礫層の間からは、湧水が多く見られます。

玉沢橋付近の地層



等々力溪谷の自然環境保全促進に関する基本調査報告書(昭和54年2月世田谷区)をもとに作成

ゴルフ橋付近で観察できる地層



木の根元付近が、礫層と高津互層の境目